



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「葉のやめどき」は「痛くない死に方」は「いづれもベストセラー」。関西国際大学客員教授。

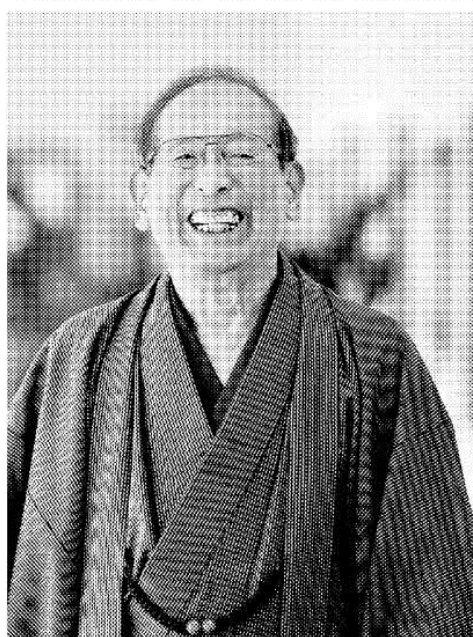
自分は純粋な「落語家」ではないので「楽悟家」である、と自称をされていました。

上方落語の最長老で、吉本新喜劇でも活躍された笑福亭松之助さんが2月22日、兵庫県西宮市内の病院で亡くなりました。93歳でした。生まれは大正14年の神戸。平成の終わりに、大正生まれの人が一人また一人といなくなってしまうのは寂しい限りです。

松之助さんは、水泳で鍛え上げた体で、80代までは病気がちらずだったようですが、昨年奥さまを亡くした後より体調を崩しがちに成り、誤嚥性肺炎で入院を繰り返していたようです。

80代、90代となると誤嚥性肺炎を起こすことは珍しいことではありません。この連載でも何度か説明をしていますが、肺炎

96 落語家 笑福亭松之助



は昨今、日本人の死亡原因の第3位。超高齢化社会に伴い、誤嚥性肺炎が増えています。全肺炎患者の内、80代の約8割、90歳以上では9・5割が誤嚥性肺炎であるというデータもあります。

と。食事の際、むせて誤嚥することは誰にでもあります。しかし、反射的に咳をして咯出する力があれば肺炎にはなりません。誤解している人も多いのですが、高齢者の誤嚥性肺炎は、食事中ではなく、寝ている間に唾液などの不顕性誤嚥によって起こるのです。寝る前の歯磨きは、高齢者こそ大切。

誤嚥が怖いからといって食べさせない、食事の楽しみを奪う介護はある意味虐待であると私は思いますし、鼻の管からの栄養や胃ろう栄養で口をまったく使わないと、逆に口腔内の雑菌

や悪玉菌が増加し、誤嚥性肺炎のリスクを高めてしまうのです。

松之助さんは、3年前に出した自伝『草や木のように生きられたら』でこのように書いています。「さんまに私が言ったことはただ一つ、人と同じことをしない」ということ…。

松之助さんが、誤嚥性肺炎に対してどのような治療をしたのか、御本人は望んでいなかったはず。その後、さんまさんは御自身のラジオ番組で明るく師匠の思い出を語っていました。

「楽悟家」だった人生